

言語類型論と対照言語学

— ことばの普遍性と個別性に対する心理主義的アプローチ —

文・教育学部日本語教育学科 講師 酒井 弘

一九五〇年代に、米国の言語学者 チョムスキー (Noam Chomsky) が 「生成文法」と呼ばれるアイデアを 提唱して以来、言語学者たちは物理的 存在としての「ことば」そのもの よりむしろ、言語使用の背景となる、 母語話者の「ことばに関する知識」 に目を向けるようになつた。

ことばに対するこのような「心理主義的アプローチ」は、近年の「認知科学」全体の発展とともに、言語学者のみならず、心理学・哲学・コンピュータ・サイエンスなど、様々な分野における研究者たちの注目を集めている。

一方で、言語類型論や対照言語学が研究対象とする「ことばの普遍性と個別性」の問題は、プラトンやアリストテレスなどギリシャの哲学者たちにも遡る、言語学における古典的な課題である。

今回の「開かれた学問」では、ことばに対する「心理主義的アプローチ」をとる現代の言語学者たちが、古典的な課題である「ことばの普遍性と個別性」の問題にどのように取り組んでいるかを紹介したい。

プラトンの問題への解答

現在世界には、四千とも八千とも言われる言語が存在し、それぞれの言語はその音韻・形態・文法的特性の面で、驚くほどの多様性を示す。しかしながら、子供たちはどのような言語を母語とする集団に生まれ育つても、それぞれの母語を使用する能力を容易に獲得する。この問題に初めて注目し、「人間にことはを獲得する能力が生得的に備わっているのではないか」と考えたのはギリシャの哲学者プラトンであった。この「プラトンの問題」(ことばを獲得する能力の本質を明らかにすること)を、言語学の課題の中心に据えたのが、チョムスキーの生成文法である。彼を中心とする研究者たちが、生成文法のアイデアを具体化するために提唱した「原理とパラメーター (媒介変項) の理論」は、「プラトンの問題」に対する現代の言語学者たちの解答であるとも言える。

図1：語彙項目：{タカシが、クミコを、愛する、-ている}

タカシが：名詞（主格）	クミコを：名詞（目的格）
愛する：動詞（他動詞）	-ている：助動詞（動詞接辞）

語表現を形成する二つの要素である「音声形式」と「論理形式」を生成することである。発話に際して、話者の心理的計算システムは、「心的辞書」の中から適切な語彙項目を選択し、記載されている情報に従って結び付けていく。例えばここで、図1のような語彙項目が選択されたとしよう（説明を簡略化するために、名詞は格助詞を伴つた形で提示されている）。「愛する」は動詞であるという情報が与えられているので、計算システムはまず、「愛する」と目的格および主格の名詞句を結び付けて、動詞句を形成する。このように複数の統語的要素を結び付ける操作は、マージ（融合）と呼ばれている（図2 参照）。

図2：マージ操作の例

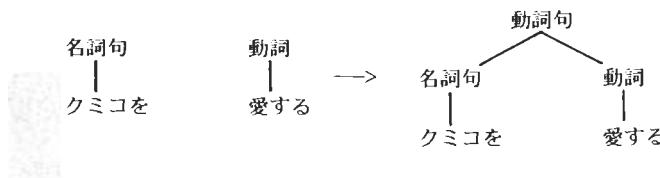
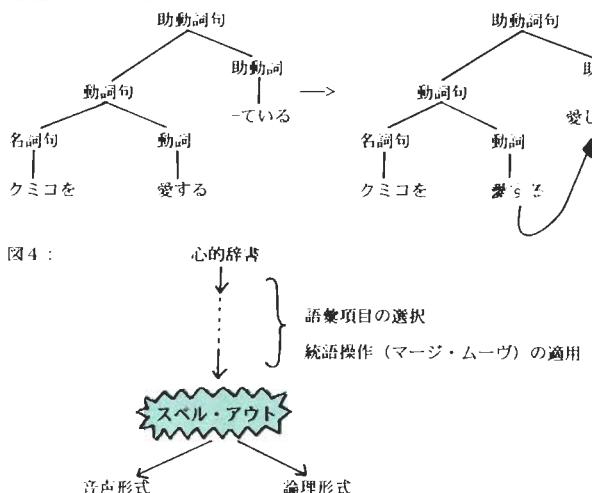


図3：ムーヴ操作の例



点で、スペルアウト（表出）と呼ばれる操作が適用され、文「タカシがクミコを愛している」の音声形式が生成される。音声形式は、発声器官の調節を司る別のモジュールによって解釈され、最終的には言語音として具現化される。スペルアウトの後も必要があれば統語操作が適用され、最終的に生成された論理形式は、言語外の知識や思考を司るモジュールによつて解釈を受け、さまざま知的活動のインプットとなる（図4参照）。

また、「……ている」が動詞接辞であるという情報が与えられているため、動詞「愛する」は、ムーヴ（移動）と呼ばれる操作の適用を受けて、接辞「・・・ている」に付加される（図3参照）。

言語表現のこのような生成過程には、さまざまな個別的・普遍的制約が課せられていると考えられている。そこで制約の具体例を示すとともに、「原理とパラメーター」

個別性 疑問文の形成に見られる

言語では、「何、だれ、どれ」のような疑問詞を使用する疑問文は「構成要素疑問文」と呼ばれる、平叙文の一部を疑問詞に置き換え、文末に「・・・か」のような疑問を示す要素を加えて表される。一方英語など第2グループの言語では、文末要素は認められず、疑問詞はそれが意味的に結び付く述語から離れて、文の先頭に外置されなければならない。

このように、これら二つのグループの言語において、疑問文はまったく異なった方法で形成されているように見える。しかし、疑問文をめぐる普遍性と個別性の問題は、見かけ程単純ではない。なかでも、疑問文の論理形式をめぐる問題は、直接観察できないだけ

疑問文を形成する方法の相違は、日本語・中国語・韓国語などを母國語とする話者が、英語を初めとするヨーロッパの諸言語を学習する際に直面する困難な課題のひとつである。例1に示されているように、日本語など第1グレードの

例 1

日本語： タカシは何を買いますか？
中国語： Míngming chī shénme ne ?
(明明は什么を食べますか？)

第2グリーフ

英語： What did John buy ?
(ジョンは何を買ったの？)
イタリア語： Chi hai incontrato ?
(君は誰に会ったの？)

例 2

- B. タカシは クミコが どの電車に乗り損ねたことを 知っている?
C. *タカシは クミコが なぜ電車に乗り損ねたことを 知っているの?

例3 : A. Takashi knows the fact that Kumiko missed the train because of the accident.

- B. Which train does Takashi know the fact that Kumiko missed?
C. *Why does Takashi knows the fact that Kumiko missed the train?

疑問文の解釈に見られる普遍性

なものに過ぎず、疑問文の形成とそ
の解釈は、両グルーピングの言語において
基本的に同一の原理に従っている
ことが明らかにされたのである。

あつた。例2に挙げた日本語の例文を参照されたい。Aの文が示すような状況において、我々はクミコがどの電車を乗り過ごしたかについて、Bのような疑問文を用いて尋ねることができます。ところが、同じ状況で電車を乗り過ごした理由について、韓ねたくとも、Cのような疑問文を用いることは許されない。CはBと比

も過言ではないぐらい、不自然な文だからである。

して、Bの疑問文が成立することは、どちらの言語も同様である。次に、英語の疑問文Cは不自然な文ではないが、実はCが不自然でないのは、この文がタカシが事實を知り得た理由を尋ねる場合に限られる。つまり英語の例文C

も、日本語の例文Cと同様に、クミコ
が電車に乗り損ねた理由を尋ねる文と
しては、解釈不可能なのである。この
ように、両言語における疑問文の解釈
には、表面的な相違にもかかわらず、
同一の制限が課せられているのである。

第2グループの言語に対するこれまでの研究から、このような制限は「なぜ」のような副詞的疑問詞が、名詞句補文(「。。。コト」型の補文)内部の述語を修飾しようとする場合に現われることが解っている。つまり、「外置された副詞的疑問詞を、名詞句補文内部の述語と結び付けて解釈することは許されない」という制約が存在するのである。ところがこの制約は、そのままでは第1グループの言語に見られる事実を説明することができない。これら第1グループの言語においては、そもそも副詞的疑問詞が外置されていないからである。それでは、我々は両者の共通点をいつたいどこに見い出したらいいのだろうか。

疑問文とパラメーター

に異なつた言語の間に見られる普遍性を、適切に捉えることができるようになる。

疑問文とパラメーター

ホアンの提案によつて、疑問文の解釈に見られる普遍性を捉えることができた。しかし、なぜ両グループの言語において疑問文形成の方法が異なつてゐるのかという、個別性の問題が残されている。冒頭で述べたように、疑問文形成の方法にみられる両グループの言語の相違として、疑問詞外置の有無に加えて、「...か」のような疑問を示す文末表現の存在が挙げられる。これは両グループの言語の予測不可能な語彙的特性である。そこでこのような要素の有無は、両グループの言語を区別するパラメーターの一部であると考えてみよう。

次に、第1グループの言語において疑問を示す文末表現が、どのような役割を果たしているかを考えて見よう。直観的に言つて、これらの要素は問題の文が「疑問文であること」を明示している。一方第2グループの言語には、このような文末表現は存在しないが、「疑問文であること」を明示する要素が他にある。第2グループの言語においては、外置された疑問詞が疑問文を示する役割を果たしていると考えられる。そこで、「疑問文は音声形式において、形態的特徴によつて明示的にマークされていなければならぬ」というもう一つの普遍的制約を仮定することができる。ただし、どのようなマーキングの方法がとられるかは、疑問を示す文

おわりに

末表現の有無というパラメーターの値によって異つてくる。第1グループの言語のように疑問を示す文末表現があれば、それを使用することで、音声形式において疑問詞を外置する必要はない。しかし、このような表現を持たない第2グループのような言語も存在し、その場合には疑問詞を外置する方法が選択されることになる。



プロフィール

知した研究者たちによる言語類型論的・対照言語学的研究が不可欠であるが、この分野での研究はまだ始まつたばかりである。